



44災当時の天気図（前線と低気圧の影響）



堤防決壊（松川村道の駅から約400m上流部）



高瀬川左岸の道路が寸断した様子



双発へりによる葛温泉孤立者救出

■千曲川58災

山崎氏：大町市の高瀬川は安曇野市明科で梓川と合流して犀川に、長野市で千曲川と名前を変えて飯山から新潟県へ流れていく。上流で被害がなくても下流で被害が出ることもある。下流の飯山市ではかつて昭和57年と58年に大水害があった。小山さんにその時の経験をお話しいただきたい。

小山氏：当時は酪農をやっていた。この地域は長い間水害がなかったため住民も油断していた。昭和57年水害は人の被害（死者）はなかったが、家畜の被害が大きかった。昭和58年は前年の教訓を活かして早めに避難させた人が多かった。2度の水害を受け、日頃から防災意識をもつことが大事だと感じた。自分たちの住む地域は長野県の水の6割が流れ込むエリア。上流で200mm降るといふ情報を聞くと身構える。昭和57、58年当時の大雨もそのようなレベルだったように思う。ダムが完成してから水害はなく、災害が少なくなったことを実感している。

上流と下流のつながりに関して、小諸や佐久地方ではお盆前にお墓参りをする習慣がある。これは、江戸期の洪水「戌の満水」の折に、飯山に流れてきた死者を佐久で埋葬し、後にご遺体を弔うために観音様をたてお参りをしたときから続いている。その災害が起きたのが、旧暦の戌年であり「戌」、「満水」とは大雨という意味。ものすごく大きな被害だった。



58災当時の天気図（台風10号の影響）



57、58災の浸水範囲と水害の状況